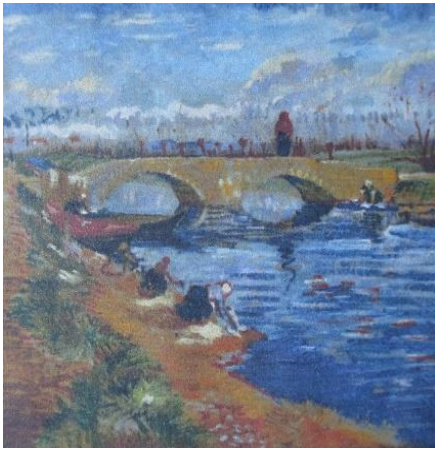


印象派、記憶への旅

ポーラ美術館（箱根・仙石原） 2019.03.23～07.28

本展は、「モネ、ゴッホ、マティス、ピカソ・・・」フランス近代美術館の収藏品として、国内外で高い評価を得ている「ポーラ美術館」と「ひろしま美術館」の日本の二大印象派コレクションが、“夢のコラボレーション”として共同企画での開催である。

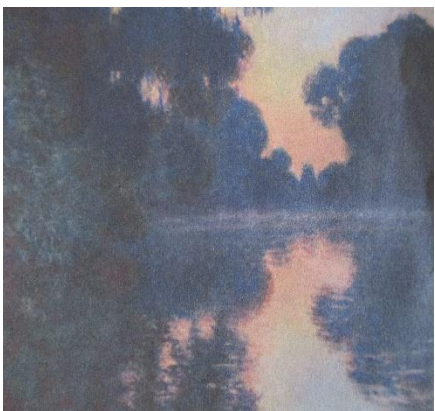
展覧会では、両館のフランス印象派の風景画を中心に「ドラクロワ」「コロー」「マティス」「ピカソ」までの「73点」の名品を選び、19世紀の画家たちの旅と記憶、都市や水辺の風景に向けられた画家たちの視線、さらに、風景の印象や移ろいゆく光の変化が留められたかたちや色彩の表現を探る企画で開催されている。



フィンセント・ファン・ゴッホ

《ヴィグラ運河にかかるグレース橋》 1888年

明るい陽光に満ちた南仏アルルを、日本の鮮やかな浮世絵の世界に重ね合わせ、憧れの日本のような場所と考えていた。橋と土手の黄色、空と運河の水面の青色に加え、橋上の人物や奥に広がる低木材、ボート、洗濯女たち、水面の輝きにアクセントとして赤色を用いている。



クロード・モネ 《セーヌ河の朝》 1897年

「セーヌ河の朝」シリーズは、光の効果によって刻々と変化する風景の全体像をとらえようと「20余点の連作」が知られているが、本作品は、川の水面に水平線を軸にし、周辺の景色が上下対象に反映され、ようやく暁を迎えた夏のひとときが、微妙な色調でありながら鮮やかに描かれて、早朝特有の湿気を帯びた冷気が感じられる。

本展では、他にモネ《睡蓮の池》、スーラー《グランカンの干潮》、マティス《ラ・フランス》、シャニック《ポルトリュウ、グールヴロ》、ピカソ《海辺の母子像》《酒場の二人の女》、セザンヌ《曲がった木》、ボナール《地中海の庭》、ゴッホ《草むら》等の名作品が展示されている。